

【読書案内】 人類文化学科の先生が入学前課題としてみなさんに推薦する図書です。

大津由紀雄 『探検！ことばの世界』 ひつじ書房
われわれにとって最も身近なことばである日本語。身近であるがゆえにふだん意識することのない日本語に潜む「不思議」を豊富なイラストを用いて解説してくれる好著。
広瀬友紀 『ちいさい言語学者の冒険』 岩波科学ライブラリー
「これ食べたら死ぬ？」のように、多くの子どもは、大人であれば絶対しないような間違いをする時期があります。ことばを身につける過程にある子どもが見せる数々の「珍プレー」は、私たちのアタマの中にあることばの秘密を知る絶好の手がかりになることを示してくれる本。
鈴木孝夫 『ことばと文化』 岩波新書
40年以上前に出版された本ですが、今でも、岩波新書のベストセラー・セクションに積み上げてあります。身近な例をとりあげて、ことばと文化について考えるきっかけを与えてくれます。「なるほど。本当にそうだろうか」などと考えながら、読んでみてください。
スティーブン・ピンカー 『言語を生み出す本能（上）』 NHKブックス
アメリカで大変な反響を呼び、ベストセラーになった本の日本語訳です。ちょっと難解ですが、言語の本質に迫る事象を多く紹介していますので、言語に興味のある人はぜひ読んでみてください。
戸田山和久 『恐怖の哲学 ホラーで人間を読む』 NHK 出版新書
ホラー作品は好きですか？わたしは苦手ですが、ホラーがどうして面白いのか、そもそも人間にとって恐怖とは何なのか、そういった問いに取り組むこの本は楽しく読めます。心理学や脳科学と地続きな研究スタイルも哲学なんだ、と知ることができます。
岡本真一郎 『悪意の心理学 悪口、嘘、ヘイト・スピーチ』 中公新書
ことばはニュースを伝えたり、情報交換するだけでなく、人を傷つけたり、騙したり、争いを引き起こしたりするためにも使えます。ことばのダークサイドに関する話題が豊富な本です。
熊野純彦 『西洋哲学史 古代から中世へ』 岩波新書
それぞれの哲学者の考えの出発点となった経験を現在の私たちにも体験可能なように書かれた新鮮な哲学史入門。同著者による『西洋哲学史 近代から現代へ』もある。
齊藤了文・坂下浩司編 『はじめての工学倫理 第3版』 昭和堂
「工学倫理ないし技術倫理」は、技術あるいは工学と現代社会とりわけ企業活動の関係の問題、たとえば欠陥のある工業製品（技術を使用して人間が作ったもの）を欠陥があると知りながら販売してしまう問題や、その失敗からいかに学びその教訓を社会で共有するかを扱うもの（「失敗学」と言われている）で、現実社会をまさに現実的に取り扱うものです。
永井均 『倫理とは何か 猫のインジヒトの挑戦』 ちくま学芸文庫
哲学の一部門としての倫理学について知りたい人のための格好の入門書。対話形式で書かれているので読み易いが、内容は大変濃い。
中島義道 『哲学の道場』 ちくま新書
哲学という学問はいかなるものであるかということについて、著者の実体験に即して明快に述べられています。

中村桂子 『科学者が人間であること』 岩波新書
人間も含んだ生きもの全体の歴史として「生命誌」を提示し続けてきた著者が、私たちの未来への熱い思いをこめて語る。大森荘蔵、宮沢賢治、南方熊楠らに学びつつ“自然”“生命”から近代科学文明を問い直す。
古市憲寿 『絶望の国の幸福な若者たち』 講談社+α文庫
格差社会のもとで、その「不幸」が言われているが、現在の生活に「満足」している若者たちの実態を明らかにした著作。
小國和子・亀井伸孝・飯嶋秀治編 『支援のフィールドワーク—開発と福祉の現場から』 世界思想社
文化人類学と周辺領域の研究者による、フィールドワークの今日的なあり方の一端がよくわかる。
吉田竹也 『反楽園観光論——バリと沖縄の島嶼をめぐるメモワール』 人間社
「楽園」イメージにもとづく島嶼観光の歴史と現状を、インドネシアのバリ島と沖縄の離島の状況を踏まえつつ論じた本。
小田 亮 『レヴィ＝ストロース入門』 ちくま新書
20世紀の新たな潮流となった構造人類学を知る上で格好の入門書。レヴィ＝ストロースの研究の基本的なポイントがわかりやすく整理されている。
田辺繁治 『生き方の人類学』 講談社現代新書
私たちが当たり前のように毎日行っている行動や慣習的行為、すなわち実践を人類学的にどのようにとらえたらよいのか、ヒントを与えてくれる書である。
中尾佐助 『栽培植物と農耕の起源』 岩波新書
今から半世紀も前の本ですが、私たちの生活の基盤となっている農耕について、基本的な事実と発想法を教えてくれる古典です。
山口昌男 『アフリカの神話的世界』 岩波新書
日本の代表的な人類学者による神話論。サハラ以南アフリカの文化的豊かさを教えてくれるだけでなく、文化人類学を研究する上で想像力が大きな意味をもつことを教えてくれる名著です。
三尾稔・杉本良男編 『現代インド6 環流する文化と宗教』 東京大学出版会
現代において、インドのヨーガやエスニック料理・ファッションなどが欧米や日本でも人気を博し、その伝統的価値が再注目されています。このような文化や宗教等がめぐりめぐって新たな価値を見出す「環流」現象を詳しく調べることによって、インド文化の根底にある思想、知識・アイデアや認識の変化と、それに伴って変わっていくインド文化の現在を考察する本です。
田中雅一・田辺明生編 『南アジア社会を学ぶ人のために』 世界思想社
カースト、ヒンドゥー教、トライブ、ヨーガなど基本的な項目について簡潔に分かりやすくまとめられています。インドに興味があり大学で勉強したいけれど、どんなテーマがあるのか分からない。そんな高校生、大学1・2年生向けにオススメの本です。

村井吉敬 『エビと日本人Ⅱ—暮らしのなかのグローバル化』 岩波新書										
著者は人類学者ではないが、エビを通して日本とアジアの繋がりを見ている。										
加藤陽子 『戦争の日本近現代史』 講談社現代新書										
日本が太平洋戦争に突き進んで行った過程を、国際的な要因も丹念にふまえて解説した本。大学での講義を基にしているので読みやすい。										
篠田謙一 『日本人になった祖先たち DNA から解明するその多元的構造』 NHK ブックス										
私たちは、みなホモ・サピエンスです。しかも、世界にはホモ・サピエンスしかいません。そのホモ・サピエンスはどこから来たのでしょうか。答えはアフリカです。そして、アフリカを出たホモ・サピエンスがどのようにして日本列島に到達したのでしょうか。それらのことが分かりやすく書かれたのが本書です。										
西田正規 『人類史のなかの定住革命』 講談社学術文庫										
10万年まえころ、アフリカから出てきた私たちの祖先（ホモ・サピエンス）は、ホモ・ネアンデルターレンシスとの生存競争に勝ち、4万年まえには旧大陸に広く住むようになりました。狩猟をしながら遊動生活を送っていました。やがて、1万2千年まえころ、気候温暖化とともに定住生活を開始しました。定住生活は人類の生活を根本的に変えました。その大転換を詳しく学べるのが、本書です。										
杉山三郎・嘉幡茂・渡部森哉 『古代メソアメリカ・アンデス文明への誘い』 風媒社										
旧世界（アジア、アフリカ、ヨーロッパ）のいわゆる四大文明とは異なる、新世界（アメリカ大陸）の二つの文明についての平易な概説書。										
川田順三 『もうひとつの日本への旅—モノとワザの原点を探る』 中央公論新社										
日本文化を身体、技術という視点から分析した本。日本の文化を再考するヒントがちりばめられている。著者は有名な文化人類学者である。										
藤本強・菊地徹夫企画監修 『世界の考古学①～⑩』 同成社										
旧大陸、新大陸の考古学研究を地域別に論じたシリーズです。みなさんが興味のある地域を選んで読んでみてはどうでしょうか。考古学の成果をわかりやすく学ぶことができます。										
<table border="0"> <tr> <td>①アンデスの考古学</td> <td>⑥中央ユーラシアの考古学</td> </tr> <tr> <td>②メソアメリカの考古学</td> <td>⑦中国の考古学</td> </tr> <tr> <td>③ギリシアの考古学</td> <td>⑧東南アジアの考古学</td> </tr> <tr> <td>④エジプトの考古学</td> <td>⑨東北アジアの考古学</td> </tr> <tr> <td>⑤西アジアの考古学</td> <td>⑩朝鮮半島の考古学</td> </tr> </table>	①アンデスの考古学	⑥中央ユーラシアの考古学	②メソアメリカの考古学	⑦中国の考古学	③ギリシアの考古学	⑧東南アジアの考古学	④エジプトの考古学	⑨東北アジアの考古学	⑤西アジアの考古学	⑩朝鮮半島の考古学
①アンデスの考古学	⑥中央ユーラシアの考古学									
②メソアメリカの考古学	⑦中国の考古学									
③ギリシアの考古学	⑧東南アジアの考古学									
④エジプトの考古学	⑨東北アジアの考古学									
⑤西アジアの考古学	⑩朝鮮半島の考古学									
印東道子編 『人類の移動誌』 臨川書店										
今日のわたし達ホモ・サピエンスはなぜどのようにして世界に拡散したのか。人類史の世界地図です。										

荻谷剛彦 『知的複眼思考法』 講談社+α文庫
大学で求められるのは、自分で考える力です。この本は、思考の方法についてヒントをくれます。
吉田憲司 『文化の「発見」』 岩波書店
現在、博物館や人類学に何が問われているのか、を知ることができる本です。ちょっと難しいかもしれませんが、名著です。
宮本常一 『民俗学の旅』 講談社学術文庫
稀代の民俗学者で旅人でもあった宮本常一の自伝。研究と旅の作法を知ることができる。この本の次には『忘れられた日本人』岩波文庫を読むことをお勧めします。
網野善彦 『「日本」とは何か -日本の歴史 00』 講談社学術文庫
「日本」という国は悠久の昔から存在した、「日本」は他の世界から切り離された「島国」だ、「日本」には稲作をする単一民族が住んでいた、あなたは漠然とこう思っていないですか。そんな常識にとらわれず、柔軟な発想をもって、この国の成り立ちを考えてみましょう。
佐藤卓巳 『ヒューマニティーズ 歴史学』 岩波書店
グローバル化が加速する現代社会では逆にさまざまなナショナリズムを煽る言説が横行しています。この本で、歴史学の立場から理性的な討議を可能にする枠組みとは何であるか、歴史の「正しい」認識とは何なのか、考えてください。
藤木久志 『雑兵たちの戦場-中世の傭兵と奴隷狩り』 朝日選書
戦国時代、まともに生業に励んでも飢餓に苦しむ人々は沢山いました。かれらは、口減らしのため雑兵となり、戦場で死と直面しながらも、人と物を掠奪してなんとか生きていきました。やがて天下が統一されると、かれらは、城の普請場、あるいはアジアの別の戦場へと向かいます。武将や軍師からではなく、雑兵の立場から戦国社会を見てください。
高橋昌明 『武士の日本史』 岩波新書
「Samurai Japan」なんて言うけれど、「サムライ」「武士」って、本当はどういう人たちだったのでしょうか？皆さんの「常識」を「史実」から確認すると、実は大きく違っているかもしれません。武士の成立から、その近代における残影までを追跡したこの本で、改めて「武士」の姿を探ってみませんか。
デヴィッド・S・ウィルソン 『みんなの進化論』 日本放送出版協会
進化を考えるととはどういうことでしょうか。専門的な研究では実験が行われていたり、数学が色々出てきたりしますが、その根本はそれほど難解なものではありません。この本では身近な現象・行動を例に挙げて、進化を考えるととはどういうことかを教えてくれます。
サミール・オカーシャ 『科学哲学』 岩波書店
科学の哲学、と聞いて「なにそれ？」な方も多いと思います。そうした方に一番おすすめできるのがこの本で、一見するとまったく関係のなさそうな科学と哲学が、実は切っても切れない関係にあることを教えてくれます。

以上